この子は自分の民を罪から救う

マタイによる福音書　１：１８－２５

司祭　ヨハネ 井田　泉

降臨節第 4 主日

2025 年 12 月 21 日

聖光教会にて

「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。』」マタイによる福音書 1:18-21

今日の福音書はクリスマス物語のプロローグです。しかしここにすでにみ子の降誕の意味がはっきりと語られています。それに耳を澄ましてみましょう。

ヨセフは苦しんでいました。婚約者マリアが、自分の子ではない子を身ごもった。どういう事情があったにせよ、これは自分への裏切りであると感じました。律法に照らせば姦淫を犯した者は石打ちの刑と定められている。けれどもヨセフは、マリアのことを表ざたにせず、ひそかに離縁することを決心したのです。

ところが主の天使が夢に現れてヨセフに言いました。

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マ

リアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

しかも天使は、これは主が預言者を通して言われていたことが実現することなのだ、というのです。ヨセフは天使の言葉を信じて受け入れました。

「ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。」1:24-25

今日は主の天使がヨセフに告げた言葉の中から、特にこの言葉に注意を向けたいのです。

「この子は自分の民を罪から救う」

日本語の翻訳の流れから「この子は」が主語になっていますが、原文は非常に強調された表現です。「この方は」**「この方こそは自分の民を罪から救う」**

これは言わば福音の中核、聖書全体のエッセンスです。人間の苦しみ、世界の悲惨の根源にあるのは罪。この方はその罪から世界を、わたしたちを救うというのです。

ヨセフとともにこの天使の言葉を受け入れて、信じて、自分も神様のなさることに身をゆだねて協力する。イエス・キリス

トを救い主として――わたしを救う方、わたしたちを救ってくださる方として信じて、この方とともに歩む決意をする。これが今日、わたしたちがクリスマスを祝う意味です。

わたしたちの信仰と生活にとって一番大切なのは何でしょうか。別の言い方をすれば、何が一番大切な名前でしょうか。イエスです。イエス・キリストの名前です。でも、わたしたちはあまりにもこの名に慣れていて、その名前の大切さ、尊さを十分意識していないかもしれません。イエス・キリストの名が、命と力を持っていること、事実この名前が人を救うことを、知らないでいるかもしれません。

しかし最初の教会、キリスト教の初めの頃は、「イエス」の名、「イエス・キリスト」の名前は、口にしただけで、心に思い浮かべただけで、感動を呼び起こした。力を呼び起こした名前なのです。神がみ子イエスをわたしたちに送ってくださった。神のわたしたちに対する愛の情熱が、この名前とともに人々の心に燃えたからです。

そのひとつの顕著な例があります。今日の第2日課、使徒書として読まれた「ローマの信徒への手紙」の冒頭、挨拶の部分です。この箇所の初めと終わりを確かめてみましょう。

「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから……」1:1

「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。」1:7

この挨拶部分に、「キリスト・イエス」あるいは「イエス・キリスト」が4回も繰り返されます。ローマの信徒への手紙全体では約 30 回です。パウロの中で、この方イエス・キリスト、その名が、どんなに大きな力となっていたかが感じられます。

もう少しローマ書の今日の箇所を読みましょう。おとめマリアに宿り、ヨセフが受け入れたこの方、イエス・キリストは、わたしたちにとって何なのか。わたしたちとどういう関係があるのでしょうか。

「わたしたちはこの方により、その御名を広めてすべての異邦人を信仰による従順へと導くために、恵みを受けて使徒とされました。」1:5

「この方」というのはイエス・キリストですね。「わたしたちは」、つまりパウロたちは、この方によって人々を信仰へと招くために使徒とされた。「異邦人」とはユダヤ人以外の人々ですから、わたしたちもそうです。その次が大切です。

「この異邦人の中に、イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがたもいるのです。」1:6

「あなたがたもいる」。「あなたがた」とはもちろん直接にはローマの教会の人々のことですが、それを超えて、このわたし

たちのこと、皆さんのことです。そのわたしたちとはどういう存在なのか。

「イエス・キリストのものとなるように召されたあなたがた」

わたしたちはイエスさまに呼ばれた、というのです。わたしたちは皆、自分の名前をイエスさまから呼ばれた。そして「召された」というのですから、ただ名前を呼ばれただけではない。何かすべきことを、大切な役割を、使命を果たすようにと呼ばれた。目的があって招かれた。それがわたしたちです。

さらにわたしたちは**「イエス・キリストのものとなるように」**召された。わたしたちはただイエスさまの近くに招かれたというだけではなく、イエス・キリストのものとなった。イエス・キリストの愛に包まれた。イエスに属する者となり、この方の守りと保護を受ける者となった。わたしたちはイエス・キリストの中に包み込まれています。と同時にわたしたち一人ひとりが、イエス・キリストの命を宿されているのです。

最初の主の天使の言葉に戻ります。

「この子は自分の民を罪から救う」

この方イエス・キリストはわたしたちを罪から救う。このことについては詳しくは別の機会に譲らなければなりません。今は二つだけ短く触れます。

まず、この方、イエス・キリストはわたしたちが罪を犯すことから守ってくださる、ということです。

ヨセフの場合を思ってみます。もし彼が、自分が正しいと考えたとおりに、マリアを離縁したとすればどうなったでしょうか。彼は自分の名誉を守り律法にかなうことをしたと言えるかもしれません。しかし現実には、身ごもったマリアと、その胎内の子を見捨てたことになる。神から与えられた良心に照らせば、それこそ罪ではないでしょうか。天使の言葉は彼の心を動かした。掟よりも、マリアの命、その胎内の子の命のほうが尊い。自分の正しさを守るよりも、マリアとその子の命を守らなければ。イエスと名付けられるはずのその子の命を守らなければ。

まだ生まれていないイエスが、ヨセフの心を動かして、ヨセフを間違った選択から守った、と理解するのは行き過ぎでしょうか。

イエスは、わたしたちの良心に働きかけて、誤った道に行かないように、罪に陥ることがないように守ってくださるのです。

もう一つ。もし、わたしたちが不幸にして過ちを犯したら、罪に陥ったらどうなるのでしょう。もしというより、現実にはわたしたちは過ちを重ねています。そのわたしたちのためにヨハネは手紙でこう書いています。

「たとえ罪を犯しても、御父(おんちち)のもとに弁護者、正しい方、イ

エス・キリストがおられます。この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償(つぐな)ういけにえです。」ヨハネの手紙Ⅰ 2:1-2

罪を犯した者のために、この方イエス・キリストがいてくださる。この方による赦しと清めがある。それが十字架の意味です。降誕の出来事は十字架につながっています。

このように、この方イエス・キリストは、わたしたちを罪から救ってくださるのです。

「この子は自分の民を罪から救う」

ヨセフはこれを信じて受け入れました。マリアも信じて受け入れました。パウロもヨハネもそれを信じて受け入れ、それを伝えました。わたしたちも信じて受け入れて、それによって生きるのです。

お祈りします。

神様、わたしたちにあなたの独り子をお与えくださったことを感謝いたします。この方がわたしたちを罪から救ってくださることをほんとうに信じて頼らせてください。み子がわたしたちのうちに宿り、わたしたちのうちに生きて働いてくださることを切に祈り求めます。尊い主のみ名を賛美します。アーメン